



ステンドグラス教室風景 (2004年1月)

# 光と色彩ガラスの ” 魔術師 ”

## ステンドグラス指導員

さまざまな色ガラスを組み合わせ、模様や風景、動物などをつくるステンドグラス。長崎の大浦天主堂や明治村の聖ザビエル天主堂などのステンドグラスは良く知られているが、大阪でも北区中之島の大阪市中央公会堂や、此花区伝法の旧鴻池本店などで美しい色模様を見ることができる。

ステンドグラスが日本に伝わったのは、江戸時代とされている。明

治・大正以降の建築物に好んで用いられるようになり、専門職による特殊技術として伝えられてきた。だが近年は機材の改良などもあって、個人工房でも楽しめるようになり、各地の生涯学習関連施設でも人気教室のひとつになりつつある。

大阪の手作り文化の発信基地として木工、染色、織物のほか金工、陶芸、ガラス工芸と多彩な工房を展開する「大阪市立クラフトパーク」でも、

ガラス工芸の分野で吹きガラス工房、バーナーワーク工房、キルンワーク工房と並んでステンドグラス工房を開講しており、多くの受講生がステンドグラスと取り組んでいる。

このステンドグラス工房の指導員が、青野広治さんである。

青野さんの教室には、初心者対象の基礎コース(週1回3時間×10回、3ヵ月)と、基礎コースを修了して続ける本科コース(同9ヵ月30回)、さらに技能を高める本科継続コース(1年以上)があり、主婦やOL、学生など19歳から79歳までの約90人が受講中。

「99年10月の教室オープンから続けている生徒さんが約2割おられます。ひとつの作品を制作するのに、けっこう時間がかかりますので、本科コースから本科継続コースに進む方が多いようです」と青野さん。

訪れた日、クラフトパーク2階の

### プロフィール 青野 広治 (あおのこうじ) さん

1965年、東京都生まれ。88年近畿大学理工学部建築学科卒業後、ガラス素材を主としたアートワークの企画制作会社に入社。ステンドグラス、モザイクパネル等のプラン及び制作技術を習得。89年8月、ドイツ南部のフラウ・ナウ市で毎年行われている著名なガラスアーティストのワークショップに参加し、グラスペインティングやサンドブラストを学ぶ。91年7月、近畿大学造形意匠ゼミのサマーセミナー(ステンドグラス)に講師として参加。97年5月に退社し独立した。主な作品に、94年の桃山学院(大阪)チャペル/レディッドグラス、大丸百貨店(福岡)/アートワークや大和キリスト教会(奈良)のステンドグラス等多数。99年10月からクラフトパークの指導員としても活躍中。

工房では、型紙に合わせてガラスをカットする人、カットしたガラスを、研磨機にかけて成形する人など思い思いの作品づくりが行われていた。そんな生徒たちの手元に気を配りながら、スタンドグラスの魅力を話してくれた。「スタンドグラスって、すごく綺麗で、夜と昼の顔があるのですが、まるで光を自分でコントロールしているような素材だと思います。だからガラスと光が一緒になってはじめて表現が可能になる、そこが一番の魅力でしょうね」と。

## サマーセミナーで スタンドグラスと出会う

東京生まれだが、「ホントに生まれただけで(笑)」、奈良県生駒市育ちだ。近畿大学附属高校から近畿大学建築学科へ進学するが、「クラブ活動らしきものは何もしていないし、組織に入ったりするのが、あまり好きではなかったようです。協調性が無かったのかも知れないですね(笑)」という学生時代。

そんな青野さんが、スタンドグラスと出会うのは、造形意匠コースに所属していた大学3年生の夏のことだ。ゼミのサマーセミナーで、スタンドグラスの制作が実施された。「必須だったので受けたのですが、スタンドグラスはもちろん、その時の先生がユニークな人で印象に残りましたね」。

就職活動に入った87年から88年に

かけては、バブル経済が右肩上がりです。住宅メーカーやゼネコンの青田買いが顕著な時代で、建築学科出身は売り手市場である。だが、「普通にゼネコンなどに就職することに疑問を持ったというか、感触的にぴったりくるものがなかったんですね」と当時を振り返る。

就職先を決めずに卒業した1ヵ月後、青野さんが訪れたのは、あのサマーセミナーの先生、八田雅博さんが主宰するアートワークの企画制作会社だった。

幸い、すぐにアルバイト(見習い)がスタート。だが、スタンドグラスについては、学生時代の経験だけである。営業を覚えながら、ガラスを切ることから始めた。入社翌年の8月には、ドイツ南部の都市フラウ・ナウに1ヵ月滞在し、スタンドグラスアーティスト、ゲルハルト・リブカさんのワークショップでガラス・ペインティングとサンドブラストを学んでいる。

帰国後も、スタンドグラスやモザイクパネルなど、アートワークのプランや制作技術の習得が仕事だった。モノづくりに対する考え方は、八田さんからの直伝である。そうしたなかで、大阪女学院や茨木教会、宝塚水明館などのスタンドグラスを制作。他にも千里阪急ホテルや桃山学院大学、東京本郷カトリック教会などのチャペルスタンドグラスの制作に参加している。

## 生駒市で独立、開業 招かれクラフトパークへ

クラフトパークの指導員に招かれたのは、クラフトパークがオープンする半年前の準備室段階からだ。

97年2月に八田さんの会社を退社し、生駒市内に個人工房を設立して制作活動を始めていた青野さんは、すでに関西では数少ないスタンドグラスの専門家として知られる存在だった。

そんな青野さんだが、教えるという部分で、悩みがないわけではない。それは、「作り方を指導するのは自分の経験で出来ますが、センスを養うというのはなかなか教えきれない」という言葉に集約されている。

スタンドグラスには、ガラスの切り方やハンドの仕方などの技術面と、もうひとつ、どのようなガラスを選ぶのか、どう組み合わせるのかといったセンス面との2面性を持ち合わせているということだ。センス面での助言をしすぎると、生徒にとってプラスにはならない。これが、「教室担当以来4年を経た今も抱きつづける、僕の中のテーマ」なのである。

だが、生徒の定着率は高い。第1期生で、本科継続コースに所属し、今はキャンドルライトを制作している団体職員の男性(40)は、「大学の卒業旅行先の長崎で、教会の床に映っていたスタンドグラスの鮮やかな色が今も印象に残っています。いろんな個性を持つガラスを組み合わせることで1枚の絵になり、光を当てると表情が変わる。見ていてあきないし、作る過程も楽しい。これから?、当然続けます」と意欲満々。

昨年7月から通っているという主婦(29)も「人魚をモチーフにしたパネルを作っています。作る楽しみだけでなく、人との出会いがあるのもいいですね」と話していた。

(文・脇本勤 / 写真・高島悠介)



大和キリスト教会小聖堂のスタンドグラスを製作(2001年7月)[写真提供=青野さん]